観能のタベ

（石川県立能楽堂）

平成二十九年八月二十六日（土曜日）午後六時三十分開演

演目解説　（金沢美術工芸大学非常勤講師　村戸　弥生）

狂言　入間川（いるまがわ）

訴訟悉くかない晴れて国元へ帰る大名が、太郎冠者を伴い東海道を下って、武蔵野は入間川まで来て、渡り瀬を尋ねるため川向こうを急ぐ何某に声を掛けます。ここは深いといわれて、それは逆さ言葉（入間様）を使うこの地では逆に浅い意だろうと思い込み、渡り損ねて怒りますが、何某も以後は入間様で応じて大名を喜ばせ、次々に持ち物を与えられます。しかし上方様での謝辞を求められ、それも入間様とは心得ず、物を取り返されます。

能　鵜飼（うかい）

安房の清澄から出た行脚の僧（ワキ・ワキツレ）が甲斐の国石和の里に着き、禁制で宿が借りられずにやむなく川崎の御堂に泊まります。そこへ噂どおり光り物が出ます。よく見ると松明をかざす老いた鵜使い（前シテ）であり、殺生の業を悔い悲しむ様子です。僧と老人の会話を聞いた連れの僧が、先年この老人に接待されたことを思い出します。老人も思い出し、自分は殺生禁断の地で密漁し、露見して処刑されたと告白した後、僧の勧めで罪障懺悔に鵜使いの業を披露します。闇夜に松明を振り、新鵜を操って思うさま魚を獲る快感は、罪も報いも忘れさせるようで、面白やを連発した老人はやがて月の出を悲しみ、暗黒の冥途に帰ります（中入）。僧らが川の小石に法華経の経文を書き、波間に沈めて弔いをすると、地獄の鬼（後シテ）が現れ、僧接待の功力と法華経の助け船によって、罪深い鵜使いを極楽へ送ると告げ、悪人成仏を可能にする、それら二つの功徳を称揚します。

（金沢大学人間社会研究域教授　西村　聡）

装束附

前シテ（老翁）　尉鬘をつけ、三光尉又は朝倉尉の面をかける。

後シテ（閻魔王）　赤頭をつけ、唐冠を頂き、小癋見の面をかける。

終了予定　午後八時二十五分頃